多賀城跡

第100次調査現地説明会
令和６年11月２日（土）
午前10：30～12：00
宮城県多賀城跡調査研究所

1．はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では、昭和44年(1969年)以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を計画的に実施し、遺跡の実態解明に向けた研究を進めています。今年度は、西辺地区で外郭（がいかく）西辺を対象に調査を実施しましたので、その成果を公開します。

多賀城政庁の変遷

第Ⅰ期：創建(724年頃)～大改修(８世紀中頃)
第Ⅱ期：大改修(８世紀中頃)～火災(780年)
第Ⅲ期：火災からの復旧(780年)～地震(869年)
第Ⅳ期：地震の復興(869年)～11世紀前半

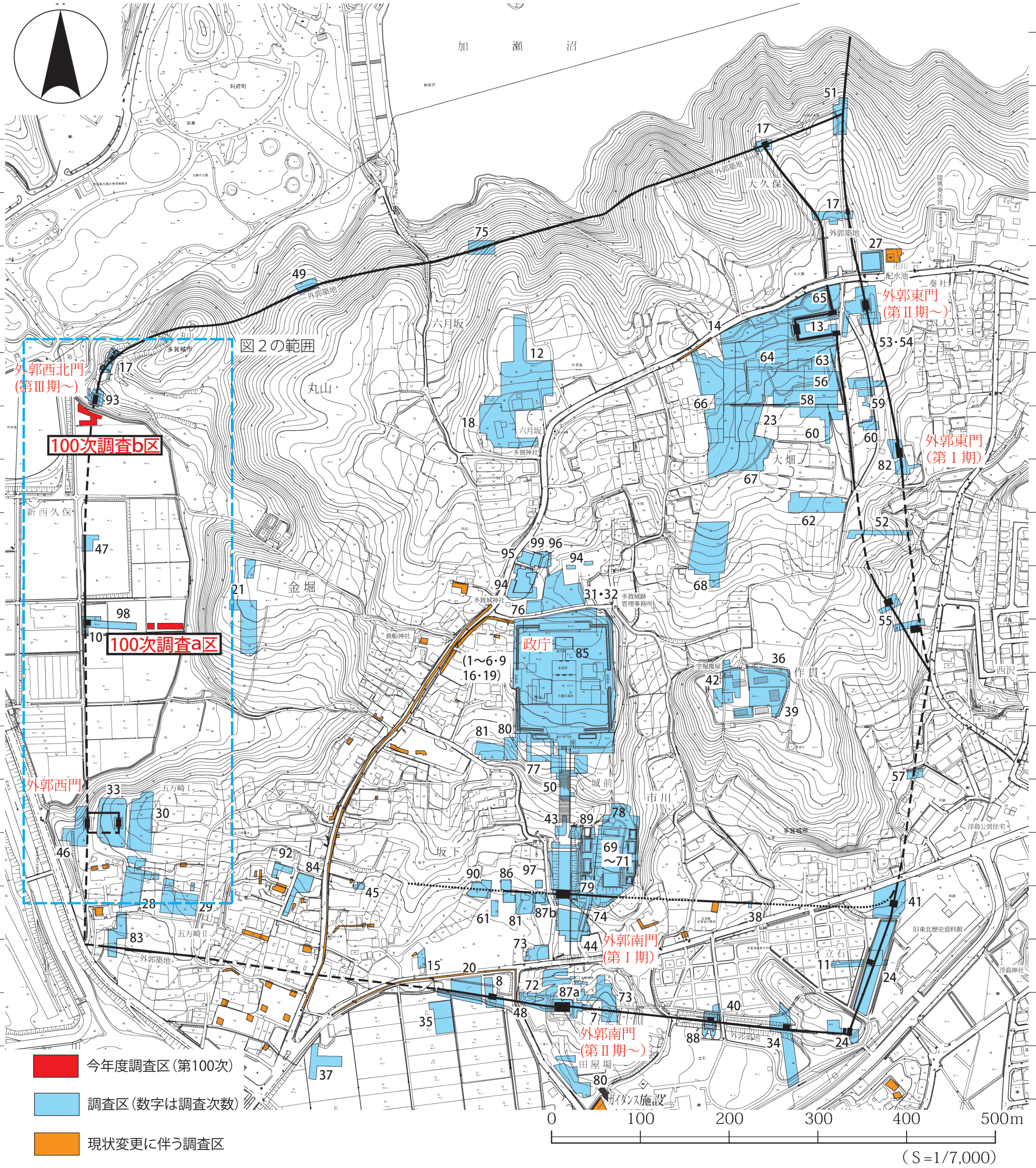

図１　第100次調査区の位置

2．調査の目的

これまでの成果

外郭西辺は、政庁から東に約530～540mの位置を、南北方向の直線状に約660mのびることが分かっており、中央部が低地部に、それ以外の南北両端は丘陵部に立地しています。低地部ではこれまで、昭和45年(1970年)度に第10次調査(写真２)、昭和59年(1984年)度に第47次(写真３)、令和５年(2023年)度に第98次調査を実施し、３時期(古い順にA→B→C期)の材木塀（ざいもくべい）とその内側の整地などを確認しています。第98次調査では、最も新しいC段階の材木塀と整地が灰白色（かいはくしょく）火山灰の降下(10世紀前葉)後に構築されたことが明確になりました。

北側丘陵部では、令和元年(2019年)度に第93次調査を実施し、外郭西辺に取り付く八脚門（はっきゃくもん）とその北側の築地塀（ついじべい）を発見しました(写真１)。門は掘立（ほったて）式から礎石（そせき）式へ変遷することが分かっています。

調査区の位置と目的

今回の調査区は、低地部中央のａ区と低地部北端から北側丘陵裾部にかけてのｂ区の、２箇所に設定しました。ａ区は第10次調査・98次調査で発見した第Ⅲ期・第Ⅳ期材木塀の東側で第Ⅰ期・第Ⅱ期の区画施設を把握すること、ｂ区は第93次調査で発見した西北門南側における区画施設の構造・年代等を解明することを、それぞれ目的としています。

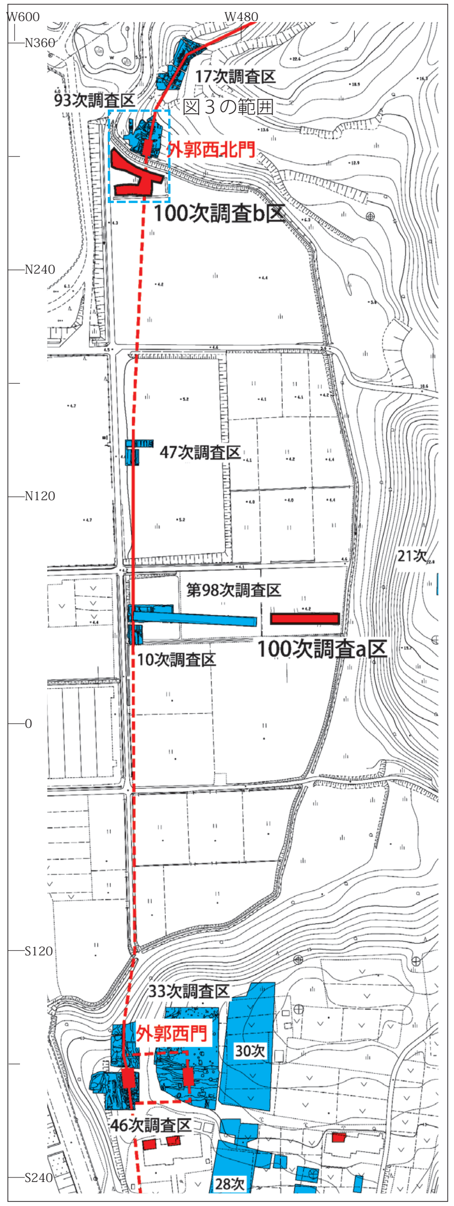

図２　周辺の調査区
(S=1/4,000)

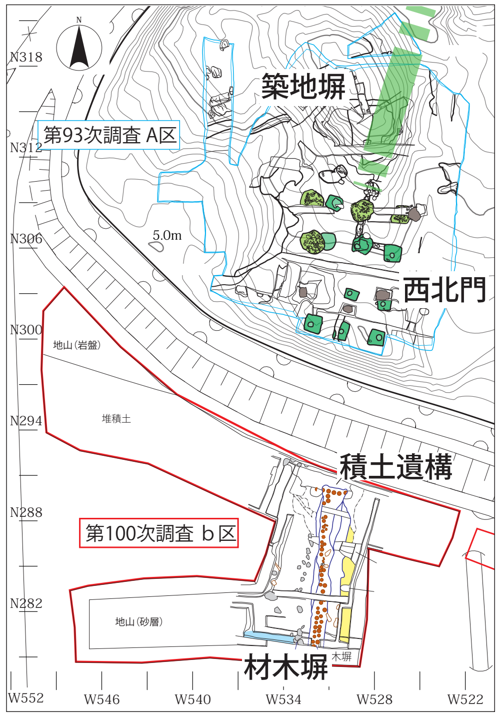

図３　第93次調査と第100次調査ｂ区の位置
(S=1/500)

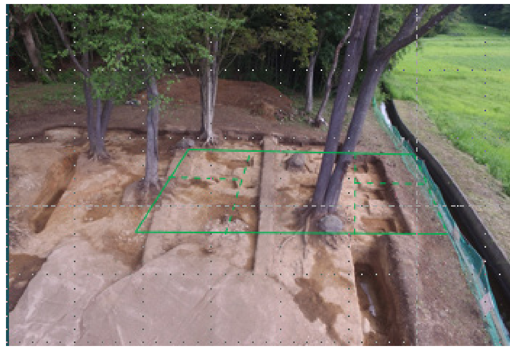
写真１　第93次調査(西から)

写真２　第10次調査(北から)

写真３　第47次調査(南から)

3．調査成果　（1）ｂ区の成果

調査区東側で、材木塀、積土（つみつち）遺構、整地層、石列、溝など外郭西辺の区画施設に関係する遺構を発見しました。主に区画施設周辺の堆積層から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、須恵器、土師器などが出土しています。ここでは、今回の最も大きな成果である低地部の材木塀、丘陵部の積土遺構について説明します。

低地部の材木塀

材木塀を南北約９m分確認しました。少なくとも以前の調査でみつかっていたＡ・Ｂ・Ｃ期に対応する３時期の変遷があり、さらに古くさかのぼる可能性がある遺構もみられます。最も良く残っているＣ期でみてみると、直径20数cmの柱材が布掘（ぬのぼり）状（溝状）掘方の中に密接に立て並べられており、柱材は最も長いもので60cm以上あります。

年代は、Ｃ期の柱材を立てるために埋められた土の中に灰白色火山灰が混入していることから、火山灰降下（10世紀前葉）以降に作り直されていることがわかります。これより古いＢ期は９世紀後半頃、Ａ期は９世紀前半頃、と考えられます。

写真４　材木塀（南から）

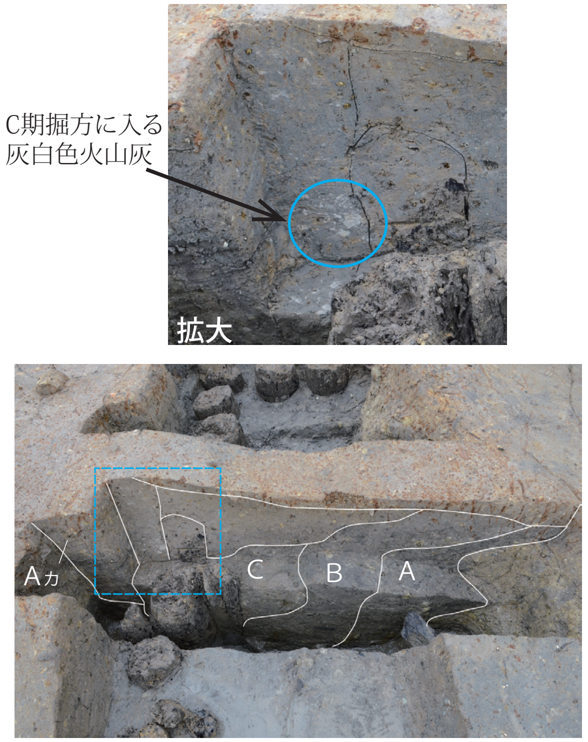

写真５　材木塀掘方の断面（南から）

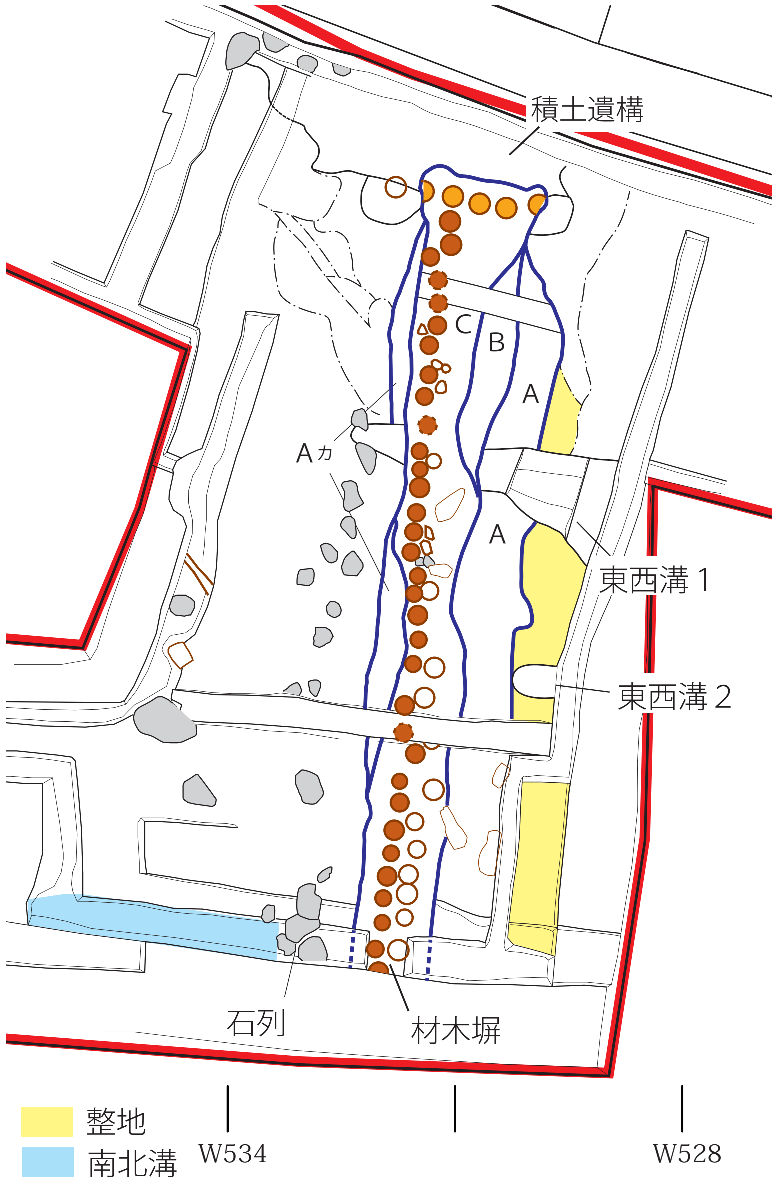

図４　b区平面略図(S=1/100)

丘陵部の積土遺構

黄褐色土と黒色土を交互に盛り土する積土遺構を確認しました。調査区の北端で南北約0.8m分検出しており、門に向かってさらに北側にのびるとみられます。東西幅は約3.0m、厚さは約0.4mです。材木塀と門の間に造られた区画施設の一部と考えられます。

構造の変換点

材木塀の北端と積土遺構の南端が接する部分では、東西方向に並ぶ５本の柱材を確認し、材木塀と「Ｔ」字状に取り付いています。より詳しい構造や変遷については検討中ですが、この地点が低地部と丘陵部の構造の変換点であることが分かりました。

写真６　積土遺構と東西に並ぶ柱列（南東から）

（2）a区の成果

小河川状の自然堆積が場所を移しながら流れていた場所であることがわかりました。区画施設は発見されず、低地部では、これまで見つかっている材木塀の城内側には区画施設が構築されていない可能性が高まりました。

写真７　調査区遠景（西から）

写真８　調査区全景（上が北）

4．まとめ

ｂ区で、材木塀と積土遺構を確認しました。これまでの成果と合わせて低地部の材木塀は約250m以上伸びていること、その北端は「Ｔ」字状に積土遺構に取り付くことが分かりました。外郭西辺は低地部と丘陵部で異なる工法を用いており、今回の調査地点がその変換点であることが分かりました。外郭区画施設の変換点を見つけたのは城内では初めてのことです。

今後は、ａ区の課題としても残った第Ⅰ期・第Ⅱ期を含めた当時の外郭西辺の様子について、区画施設変換点の構造や変遷、整地や石列など関連する施設の検討などを続けて明らかにしていきたいと思います。

第100次調査要項

所　在　地：宮城県多賀城市市川字新西久保地内
調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長　佐藤 信）
調査主体：宮城県教育委員会（教育長　佐藤　靖彦）
調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長　吉野　武）
調査協力：多賀城市教育委員会
調　査　員：吉野武・関口重樹・廣谷和也・古田和誠・
村田晃一・鈴木貴生・何戌琪
調査期間：令和６年5月20日～11月30日（予定）

発掘現場から
文化力
POWER OF CULTURE

宮城県多賀城跡調査研究所
〒985-0862　宮城県多賀城市高崎1-22-1
ＴＥＬ：022-368-0102　ＦＡＸ：022-368-0104　http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/